天神縁起と太平記

問 題 心の所在

それだけではない。内外の古典を縦横に引用しながらの叙 述であることも、 に満ちた編集であることも影響している。 象とするが、それを四十巻もの大部な書物としている。か 足利義満の将軍就任まで、時期的にはわずか五十年間を対 であることが第一に挙げられよう。また、軍記特有の逸話 くも長編となった理由は、扱う時期が内乱の混迷した時代 **『太平記』** は長編の軍記である。 一因となっている。 後醍醐天皇の治世から しかし、 理由は

か、

あえて天神縁起をほぼ全編紹介しなければならなかったの

理由が問われるべきであろう。中世の百科事典ともい

本稿では『太平記』巻十二「公家一統政道事

付菅丞相

を紹介しているのは、特別の意味があってのことだとみな ない。これらのことから考えれば、『太平記』が天神縁起 社縁起となると、天神縁起の他にはほとんど引用がみられ うべき『太平記』には、他書からの引用が多いが、こと寺

を説明しようとしている。そのなかで、天神縁起が長文に 派に造られた大内裏が何度も焼失し、今に至っているのか 議をうけて大内裏を造営するにあたって、なぜあれほど立 的背景を考えてみたい。巻十二では後醍醐天皇が諸 事」にみられる天神縁起に注目し、その書承的および思 わたって紹介されるのであるが、前後の文脈から考えて、 卵の 建

八 木

聖

弥

さなくてはならない。

る。もう一つの古態本である神田本は巻十二を欠佚するか との影響関係を検証したい。 道集所収本を比較の対象とし、『太平記』所引の天神縁起 などから建久本・建保本・承久本・安楽寺本・黒川本・神(๑) は『太平記』は古態本の一つとされる西源院本を基準とす したが、氏のいう「形態」の意味が判然としない。本稿で が天正本の『太平記』の校注で承久本の形態に近いと指摘 久本などと比較するに終わっている。最近では長谷川端氏 氏も具体的な考察はしておらず、文言の一部を建久本や承 な比較には及んでいない。博覧強記をもって鳴る岡見正雄 起が『太平記』に影響を与えたことは指摘したが、具体的 拠はまったく示していない。村上学氏も安楽寺本の天神縁 寺本の天神縁起に近いのではないかと指摘したが、その根 成果を得ていないのが実状である。古く後藤丹治氏は安楽 かを考える。従来の研究では、この点に関してまとまった 天神縁起は、 らである。天神縁起はその成立年代・系統分類・伝存形態 以上の問題意識にたって、まず『太平記』に紹介される 諸本あるうち、いずれにもっとも近似するの

源院本では巻十二だけではなく、巻二十六や巻三十五などに視点を定める。『太平記』に引用される天神縁起は、西第二には『太平記』に天神縁起が引用された背景は何か

といえよう。作者の引用意図を考えることによって、そのうに位置づけるかは『太平記』研究の根幹にも関わる課題あろう。そうした事情のなかで、天神縁起の引用をどのよような形になったわけではない。作者についてもある特定ような形になったわけではない。作者についてもある特定にも一部みることができる。したがって、この問題は巻十にも一部みることができる。したがって、この問題は巻十

一『太平記』所引の天神縁起

思想自体が明らかになると思われる。

って、どのような影響関係にあるかを考えることにする。源院本を基準に据え、天神縁起の諸本と比較することによまの形で載せているわけでもない。ここでは『太平記』西れか一本を原拠としているわけではなく、縁起文をそのま紹介されている。しかし、諸本ある天神縁起のうち、いず『太平記』では巻十二を中心として天神縁起がほぼ全編

(1) 前 文

彼天満天神ト申ハ、風月之本主、文道ノ大祖タリ、天『太平記』では冒頭にいわゆる大江匡衡の奏状を載せる。

ニ居マシテハ日月ニ光ヲ顕シテ国土ヲ照シ、地ニアマ

これを天神縁起諸本と比較してみると、まず神道集本では、 下テハ鹽梅ノ臣ト成テ群上ヲ利シ給フ、

その末尾に挿入する形で、 抑右天満大自在天神、或鹽梅シ天下ニ於テ輔ニ道於一

中文道ノ大祖、風月本主ナリ、翰林ノ人尤モ夙夜ニ 人 '、或ハ日月トシテ天上ニ於テ照 '臨ス万民ヲ'、就」

可三勤労スニ、

たうえで冒頭に位置し、「翰林」以下の文言は省略している。 となっており、「風月」「文道」が「鹽梅」以下と逆になっ

これは安楽寺本でも同様であり、やはり末尾に、 道ノ大祖、風月ノ本主也、翰林ノ人最モ可三夙夜ニ懃 或ハ為テニ日月こ、於テニ天上ニニ万民ヲ照覧、就ニ中文 右天満大自在天神、鹽「梅ニシ天下ヲ「、補」導ス一人ヲ「、

る。これを建保本によってみると、やはり冒頭に、 から、縁起冒頭に位置していたことは『太平記』と共通す は天上に日月として国土を照らし給へり」としていること ため比較しえないが、しかし途中から「帝図を輔導し、或 末尾の所載となっている。建久本はこの箇所が巻首脱落の となっている。安楽寺本系の黒川本でもほとんど同文で、

其むかしをたつぬれは文道の大祖、風月の本主なり、

うえ考察する。まず神道集本では

この箇所は諸本によって多少異同があるので、諸本列挙の

あるひは天下に鹽梅として帝図を輔導し、或は天上に

日月として国土を照曜し給へり、

『太平記』は建久本・建保本・承久本により近いことが理 頭に置いている。したがって、匡衡の奏状に関していえば、 わかる。その点、承久本においてもほぼ同様の文を縁起冒 とある。「風月」と「文道」の位置は反対であるものの、 「国土」の文字が入ることもまた『太平記』に近いことが 天下を鹽梅云々との位置関係は『太平記』と共通するし、

②菅公出現

解されよう。

『太平記』では続いて菅公出現について述べる。 給タリ、菅相公アヤシト見給フテ、君ハ何レノ処ノ人、 其始ヲ申ハ、菅原ノ宰相是善卿ノ南庭ニ、五六歳計ナ 御名ヲハ菅少相トソ申ケル、 テ、鴛鴦ノ衾ノ上ニ恩愛ノ養育ヲ事トシテ人ト成奉ル、 レハ、相公ウレシクヲホシテ、手ツカラカキイタキ奉 ク母モナシ、願ハ相公ヲ親トセムト思侍也ト被」仰ケ 誰カ家ノ男ニテヲハスルトソト問給フニ、我ハ父モナ ル小児ノ容顔美麗ナルカ、前栽ノ花ヲ詠シテ只一人立

抑菅相院ト申ハ、菅原ノ院是ナリ、菅原ノ院ト申ハ、 シ、相公ヲ親セント仰ラレケレハ、相公返々モ悦、舁 児答テ言ハク、差定タル住居無シ、亦父モ無ク母モ無 ツ六ツ許ナル小児ノ行キケルヲ、相公見給テ近付給フ 菅相公是善ノ家ナリ、相公ハ平生ノ当時ニ、南庭ニ五 ニ、容顔美麗ナリ、只人ニハ非ト思テ申給ケルハ、君 ハ何クヨリノ人ソ、何ニ依テ来リテハ遊ヒ給ソト、此

安楽寺本では

懐キ奉ツ、賞シ遵キ奉リ給事限無シ、

是菅贈大相国申、又北野天満大自在天神申也 住所 ′、願只奉 ム憑□相公親□云々、其時相公悦、 非「只人「、疑「聖衆来現之方便「歟、在相公問云、 年春之比、相公之南庭、五六歳計児遊侍、形皃美円、 抑菅原院申者、菅相公是善家也、仁明天皇御宇承和四 奉↘懐□小児□、饗応許諾、命↘研↘精、才智日日新也′ 人子、自:|何処||来給、小児答云、吾是無||親族|、無|

黒川本では

我ハ親父モナシ、願クハ菅相公ヲ奉ゝ憑父トセント云々、 誰人ノ子、何レノ処ヨリ来リ給ヘルゾヤ、児答テ云ク、 衆来現ノ方便カトゾ疑ハレケル、相公問テ云ク、君ハ 五六歳計ナル児遊ビ侍レリ、ミメ姿チ唯人ニ非ス、聖 抑菅原院ト申スハ、菅相公惟義ノ家也、相公ノ南亭ニ

> 北野ノ天満大自在天神トモ申ス也 時ニ相公喜テ、即自ラ児ヲ懐奉リ、敬養シテ研精セシ メ玉へハ、才智新タ也、是ヲ菅贈大相国トモ申シ、又

建久本では

菅原院と申は、菅相公是善の家なり、相公平生の当時 さためたる居所もなし、又父もなく母もなし、相公を ひありき給けるを、相公見給ふに、容顔体皃た、人に は侍なる、 日あらた也、これを菅贈大相国とは申めりと、 かきいたきかいなて、、漸研精せしめ給けれは、天才 父とせんとそ思ひ侍ると仰らるれは、相公大に悦て、 よりてか来り遊ひ給ふと、小ちこ答へ給ふ様、させる あらすとおもひつ、、君はいつれの家の子男そ、何に かの家の南庭に五六歳はかりなるおさなき小児のあそ 日記に

建保本では、

き児のあそひ給けるを、相公みたまふに、容顔体皃た、 平生のとき、彼家の南庭に五六歳はかりなるうつくし 菅原院と申は、菅相公是善の家なり、そのかみ菅相公 相公をおやとせむとおもひ侍なりとおほせられけれは、 たまふやう、我さためたる在所もなし、父母もなし、 家の子男そ、なに、よりて来給うととひ給に、こたへ 人にあらすとおもひて申たまひけるは、君はいつれの

とは申ける、しめたまひけれは、天才日新なり、これを菅贈太相国相公よろこひて、いたきたてまつりて寵愛し、研精せ

承久本では、

ければ、相公返々悦てかきいたき給けり、此を菅贈大ければ、相公返々悦てかきいたき給けり、此を菅贈大う、きみは何の家の子男そ、なに、よりてきたりあそう、きみは何の家の子男そ、なに、よりてきたりあそう、きみは何の家の子男そ、なに、よりてきたりあそう、きみは何の家の子男そ、なに、よりてきたりあそう、きみは何の家の子男そ、なに、よりてきたりあそう、着いでは、相公を見いた。

相国とは申也と日記には侍り、

る記述で結んでいるのに対して、神道集本ではそれに関する記述で結んでいるのに対して、神道集本のみである。また「父モナク母モナシ」との表現は、神道集本でも同様であるが、建久本・承久本でも同じは、神道集本でも同様であるが、建久本・承久本でも同じは、神道集本でも同様であるが、建久本・承久本でも同じは、神道集本でも同様であるが、建久本・承久本でも同じは、神道集本でも同様の表現をとっている。『太平記』では「容あらわれた道真の容姿についてである。『太平記』では「容あらわれた道真の容姿についてである。『太平記』では「容あらわれた道真の容姿についてである。『太平記』では「容が

本を主として参考にしながらも、建久本以下、とりわけ承これらのことからすれば、『太平記』は基本的には神道集本・建保本・承久本では「菅贈大相国」のみを挙げている。に加えて「北野天満大自在天神」まで紹介しており、建久る記述はみられず、安楽寺本・黒川本では「菅贈大相国」

(3)十一歳の詩作

久本も参照した可能性が高いといえよう。

十一歳の詩作の段においても、『太平記』は貞観十二年(八十一歳の詩作の段においても、『太平記』が承久本も視野に入さが、神道集本および安楽寺本・建保本・承久本では等しくいないにも関わらず、建久本・建保本・承久本では等しくいないにも関わらず、建久本・建保本・承久本では等しくいないにも関わらず、建久本・建保本・承久本では等しくいないにも関わらず、建久本・建保本・承久本では等しくいないにも関わらず、建久本・建保本・承久本では等しくいないにも関わらず、建久本・建保本・承久本では等しくいないたことが理解されるであろう。

(4)顕揚大戒論序の起草

ころがない。建久本・建保本・承久本では序文自体を引用るが、『太平記』ではこの件についてはまったく触れると続いて天神縁起では「顕揚大戒論序」の起草の記事が入

の箇所がまったく不要とうつったからとみなせよう。 大きくはずれるからであり、『太平記』作者の判断ではこ 文作成のことは天神縁起を『太平記』の場合はそういった るとの見方を示している。『太平記』の場合はそういった るとの見方を示している。『太平記』の場合はそういった すまの叙述だけに終始している。松本隆信氏はその理由を 事実の叙述だけに終始している。松本隆信氏はその理由を してくわしく紹介するが、安楽寺本ではそれがみられず、

(5十首の誤作

吉祥院での五十賀を省略したために、大きな誤りを犯すこち祥院での五十賀を省略したために、大きな誤りを犯すこの段とともに天神縁起では紹介する寛平六年(八九四)のいとだており、『太平記』では「同年三月廿六日」のこととして述べられているのは注意される。ここでいう「同年」とはその前の段をとも一致をみず、相当の違いがある。ただ、この段が『太とも一致をみず、相当の違いがある。ただ、この段が『太さの詩作を命じる段がくる。本文は天神縁起諸本のいずれ首の詩作を命じる段がくる。本文は天神縁起諸本のいずれ言の詩作を命じる段がくる。本文は天神縁起諸本のいずれ言の詩作を命じる段がくる。本文は天神縁起諸本のいずれ言の詩作を命じる段がくる。本文は天神縁起諸本のいずれ言の詩作を命じる段がくる。本文は天神縁起諸本のいずれ言の詩作を命じる段がくる。本文は天神縁起諸本のいずれ言の詩作を命じるといいがある。

神道集本 「同(寛平)七年春三月ノ晩」表現の違うところでもある。列挙すれば、とになった。なおかつこの月日には天神縁起諸本で微妙に

安楽寺本 「同(寛平)七年春三月暮」

建久本 「同(寛平)七年三月廿六日」

黒川本

同

(寛平) 七年春三月ノ暮」

建保本「寛平七年三月廿六日」

本の二本である。承久本は「廿三日」とするも、原拠の『菅日付まで入れ、しかも「廿六日」とするのは建久本と建保承久本 「同(寛平)七年三月廿三日」

り建久本にならって「同七年」とするべきところが「七」ら、『太平記』は建久本を参考にした可能性が高い。つまや「暮」とすることはあっても、その逆は不自然であるかる。建保本は「寛平」の年号も入れている。「廿六日」を「晩」家文草』では「廿六日」に作るため、承久本の誤りといえ家文草』では「廿六日」に作るため、承久本の誤りといえ

(6)時平の讒言による道真左遷

を欠落させたものと考えられる。

改変を加えている。したがって、天神縁起諸本との比較は、道真が藤原時平の讒言にあう段は、『太平記』が大幅に

此時本院之大臣ト申セシハ、大織冠九代之孫、照宣公困難である。『太平記』ではこの段を、

帝サラハ世ヲ乱リ、民ヲ害スル逆政也、非ヲ諫メ、邪愁ヲ不」知、非ヲ以テ理トスル由ヲ讒ニ申サレケレハ、位付其ニ菅少相ニ超サレ給ケレハ、御憤更ニ休時ナが、光卿、定国卿、菅根朝臣ナトニ内々相謀テ、陰陽シ、光卿、定国卿、菅根朝臣ナトニ内々相謀テ、陰陽が、光卿、定国卿、菅根朝臣ナトニ内々相謀テ、陰陽が、光卿、定国卿、菅根朝臣ナトニ内々相謀テ、陰陽が、光卿、定国卿、菅根朝臣ナトニ内々相謀テ、陰陽が、光卿、定国卿、菅根朝臣ナトニ内々相謀テ、陰陽が、光卿、定国卿、菅根朝臣ナト、村上天皇之御伯父也、摂第一之男、皇后ノ御セウト、村上天皇之御伯父也、摂

左遷に及ぶと説明している。と述べ、道真が儒教の精神にもとる臣下であるとの理由でと述べ、道真が儒教の精神にもとる臣下であるとの理由で「ヲ禁スル忠臣ニ非スト思食レケルソ浅増キ、

できるであろう。

できるであろう。

な治を儒教とりわけ『貞観政要』の君臣論で解釈する方の治を儒教とりわけ『貞観政要』の君臣論で解釈する方の治を儒教とりわけ『貞観政要』の君臣論で解釈する方の治を儒教とりわけ『貞観政要』の君臣論で解釈する方の治を儒教とりわけ『貞観政要』の君臣論で解釈する方の治を儒教とりわけ『貞観政要』の君臣論で解釈する方の治を儒教とりわけ『貞観政要』の君臣論で解釈する方の治を儒教とりわけ『貞観政要』の君臣論で解釈する方の治を信義といいた。

臣のうち、いずれか一人にすべきであると相談していたと宇多法皇と醍醐天皇の密議から始めている。両帝は左右大道真左遷事件に関して、天神縁起諸本では共通してまず

構想されているとし、安楽寺本系は道真左遷の責任を時平言が必ずしも不当ではなく、むしろ非は両帝にあるように時平の讒言が大きく取り上げられる結果となっている。こ時平の讒言が大きく取り上げられる結果となっている。こころに、藤原時平がこれを漏れ聞き、道真の失脚を企てる。

的な姿勢をうかがうことが可能であろう。 出されていることを知るとともに、『太平記』作者の基本 があると考えられる。ここに天皇権威の失墜が如実に描き して、『太平記』においては時平の讒言は迫力を欠き、 格上、道真を主に置く反映であって、両帝の非を責めてい しろ時平の讒言を受け入れた醍醐天皇に対する批判に眼 定される結果をもたらしたとみるべきではなかろうか。そ ているということは、時平の権勢欲に対する批判にのみ限 ある。それが安楽寺本では両帝の密議がほとんど省略され 言をした時平に対する批判の強調とみることができるので るわけではなかろう。むしろ、両帝の意向に背いてまで讒 していることは明白である。しかし、これは天神縁起の性 わけではないが、ここでは両帝が道真のみを重用しようと 人に絞るべきとの表現をとっており、道真の名を直接出す 一人にかぶせ、事件の非合理性を強調していると説いた。(②) 建久本などでは両帝の密議の内容が左右大臣いずれか

うたは、『太平記』では、 道真の左遷が決まり、 いよいよ出立となった際の有名な

する。『太平記』では「桜花ヌシヲワスレヌ物ナラハフキ 神道集本では「春な忘れそ」に作る。したがって『太平記』 を示さなかったことを物語るとともに、醍醐天皇と関係す め、たんに「飛梅」のみとするが、いずれにしてもこの段 はなく、承久本に至ってはじめて「飛梅枯桜」として登場 に紹介する。周知のとおり、飛梅の件は建久本・建保本に では「春を忘るな」であるのに対して、安楽寺本・黒川本・ であるが、これも末句が天神縁起諸本で異同がある。漢字・ の讒言における作者の姿勢がここでも貫かれているといえ る話を意図的に削除した結果であると思われる。先の時平 すべて割愛している。これは『太平記』作者が詩作に関心 を紹介するものの、いわゆる恩賜の御衣にまつわる一件は 去」の詩の一部を載せ、北の方へのうた「君ヵ栖宿ノ梢ヲ」 も『太平記』は安楽寺本系によっていることが理解される。 コン風ニコトツテハセヨ」(神道集本)のうたを載せないた 『太平記』は梅が大宰府まで飛んだという飛梅説話を簡単 は安楽寺本系によっていることが明らかである。このあと かなの表記に違いがあるものの、建久本・建保本・承久本 続いて『太平記』は筑紫途上で詠んだ「自従「勅使「駈持 東風吹ハ匂ヲコセヨ梅ノ花主無トテ春ナ忘レソ

> ため、天神縁起諸本との比較は不可能である。 たことで終わっている。ここにも大幅な省略を施している 簡単に記し、道真薨去のことへと進み、安楽寺を墓所とし よう。そして『太平記』はこのあと天拝山での告文上天を

(7) 既麥天神

がだれに怨みを報じたいのかがはっきりと描写されていな 擬レ入ニ花洛:」という程度であり、 生合、讒奏無実故、左遷流罪之成「拙身」、為」報」怨為」雷 え不明確な表現である。安楽寺本系においても「口惜濁世 報せんとおもふ」と述べるに留まっており、怨みの対象さ する構想といえる。建久本・建保本・承久本では「怨をも とする。前段同様、醍醐天皇に対する怨みを直接的に強調 有テ、臣無実之罪ニ沈メル事、嗔恚ノ炎却テ火ヨリモ盛也 のもとに来た道真の霊がいうには「君時平公カ讒ヲ御許容 本によったか決しがたいほどである。『太平記』では尊意 と同様であるが、表現上は大幅な改訂を行っており、どの 『太平記』における柘榴天神の段は、内容上は天神縁起 やはりこの段階で道真

ル也」といい放ち、その際は山門の惣持法験が示されるで 二近付、我ニツラカリシ侫臣讒者、一々ニケ殺サムト存ス さらに『太平記』では「其恨ヲ報セム為ニ、九重之帝 いのである。

記』作者が山門に対して抱く意識を如実にあらわしている これも天神縁起諸本にはみられない結論であって、『太平 登山した山門の「効験天下称歎幷ナシ」と位置づけている。 尊意は水を左右に分けて車を進めたとの話の際も、 見いだせない。また山門の語がみえるのも注目されるとこ 戸も、天神縁起とは違い『太平記』では山門に残っている ろであろう。道真が柘榴を吹きかけて燃やしたとされる妻 あろうと述べる。天神縁起諸本にはこれほどまでの迫力は あるいは道真の威により賀茂川が増水したとき、 尊意が

が行う改訂である。 に儒教的解釈に基づく回答であり、これは『太平記』のみ 君與臣、上下之体猶重シ」との理由を挙げている。 ころが『太平記』では「貴方ト愚ト師資ノ義不」浅ト云共 王民思想をもちだし、二度までは拒否しうるも三度の要請 があったときには、案内せざるをえないと答えている。と ないと依頼する。天神縁起ではこれに対して、尊意は王土 道真は尊意に対して帝の命令があっても参内してはいけ 明らか

(8)清涼殿落雷

われる。 こうしてついに道真の霊は清涼殿への落雷となってあら 清涼殿への落雷は、 史実では延長八年(九三〇)六

> 二回落雷したように記述されている。『太平記』では一回 記事を混同しており、しかも文意に錯簡が認められる。 に該当する。なおかつ『太平記』は天神縁起の二度の落雷 段の直後であり、天神縁起に記すところの第一回目の箇所 のみの落雷記事を載せる。しかし、その位置は柘榴天神の の記事によって時平在世中に落雷があったとすることから 月二十六日の一回だけであるが、天神縁起諸本では『大鏡』

にあったとするが、第二回目については諸本間で多少の異 を抜いてこれに対抗したといい、第二回は数名の公卿が難 天神縁起では第一回の落雷に際しては、 時平一人が太刀

同

がある。建久本では、

といえよう。

は焰にむせんて悶絶す、 にけころされ、近衛忠包ひんやけて死亡しぬ、紀蔭連 たふれふし、是茂朝臣は弓をとりむかへはたちところ ともきえさりき、右中弁希世朝臣は顔やけて柱の下に 大納言清貫卿うへのきぬに火つきてふしまろひおめけ (建保本・承久本もほぼ同様

焼炭 成 炎悶絶、 大納言清貫卿表衣火烘付伏倒、 嘩喚在、

安楽寺本では、

右大弁希世朝臣貌焼倒、

近衛忠兼焼、鬢亡、

紀蔭連咽

黒川本では、

右中弁希世朝臣、 顔ヲヤキテ倒レヌ、近衛忠兼ハ、モ

悶絶ス、大納言清貫卿ハ、上ノ衣火モエツキテ、臥マ ロヒヲメキサケベトモ、ヤケスミノ如ニナリニケリ、 ト、リ焼テ死亡シヌ、紀ノ蔭連ハ、ホノホニムセンテ

忠安ハ本鳥焼ケキ死亡ス、紀ノ蔭連ハ炎咽テ悶絶ス、 大納言清貫卿ハ上ノ衣火燃付テ、伏辷喚叫へ共、焼炭 右中弁希代ノ朝臣ハ顔ニ火燃付テ倒レニケリ、 ,如ニ成ニケリ、 近衛

これが『太平記』においては

向ヒ給へ共、五体スクミテ、ウツフシニ(脱アルカ) 天雷也共、王威ニ恐サラムヤトテ、弓ニ箭ヲ取副テ立 ス、右大弁希世朝臣ハ心剛ナル人成ケレハ、縦何ナル 大納言清貫卿ノ袂ニ火モエツイテ、臥マロヒ給ヘト消

炎ニ咽ヒテ絶入ニケリ

あるが、はたして近衛忠包のことも記載されていたかどう えば、建久本系に等しい。途中、脱文があるため、炎にむ 黒川本・神道集本と同じであるが、氏名の記載順序から 混乱である。『太平記』で是茂が登場しないのは、安楽寺本 が弓矢を手にして対抗したとするのは、明らかに是茂との ら、この箇所は安楽寺本に近いといえよう。しかし、希世 となる。史実では右中弁の希世を右大弁としていることか せて悶絶した紀蔭連が記載されていたことは想定が可能で

> どでは忠包のことも載せており、建久本などと同様、鬢を たのかもしれない。 焼かれて死亡したと述べているので、あるいは記載があっ かは不明である。ただ『太平記』の今川家本や相承院本な

えって王威の失墜を物語る結果となるであろう。『太平記 縁起諸本にはみられない。しかも「心剛ナル人」である彼 と語らせているのは『太平記』作者の増補であって、天神 作者の眼目は、ここにあったと思われる。 疑いない。彼に「縦何ナル天雷也共、王威ニ恐サラムヤ」 が五体すくんでうつ伏せに倒れてしまったとあっては、か 『太平記』では希世を中心において構成していることは

(9)浄蔵加持・時平薨去・公忠蘇生

述は簡略なものとなっており、天神縁起諸本のいずれ

続く浄蔵加持・時平薨去の段においても『太平記』の叙

か結論を先走っている感があるを否めない。 在天神」と位置づけている。『太平記』においてはいささ に対して、『太平記』では「菅丞相ノ変化ノ神、天満大自 を天満大自在天神の第三の使者・火雷火毒王としているの もみられるところである。しかも天神縁起ではいまだ青龍 ら出てきた青龍を青蛇とするなど、『太平記』独自の表現 ったか判断がつきがたい。浄蔵の加持によって時平の目か 者の思想が色濃く反映しているといえよう。 主張するくだりは、 り、先述と同様の姿勢が貫かれていることが理解される。 道真の批判は讒言をなした時平よりも、これを信じて大宰 ためて自分が冤罪を蒙ったことを主張するとともに、 キ、其誤り尤重シ、早ク庁ノ御礼ニシルサレテ、阿鼻地嶽 安楽寺本とほぼ同様の表現である。しかるに『太平記』で う構成になっていない。安楽寺本では「延喜天皇、 そばだてて聞くと、道真は自分が冥宮にいなければならな ところであって、『太平記』作者の意図的改変である。 なおかつ道真が醍醐天皇を阿鼻地獄へ落とすべきであると 府左遷の命を出した醍醐天皇に主眼がある構成となってお の讒言を信じた醍醐天皇の誤りは重大であると述べている。 へ落サルヘシト申サレシカハ」となっている。道真はあら は「延喜帝王、時平大臣カ讒ヲ信テ、罪ナキ臣ヲ流サレ候 する批判を強めている感がある。黒川本や神道集本でも、 不ト浅之間、欲ト報ニ其怨ニ」として、いささか醍醐天皇に対 みられる。建久本・建保本・承久本では等しく公忠が耳を い理由として「延喜の聖主のしわさともやすからさる事」 (建久本) と述べている程度であって、直接的な怨み言をい 公忠蘇生の段においても、冥宮での道真の発言に特徴 天神縁起諸本にはまったくみられない 時平 作

10日蔵上人六道めぐり

にも引用されるから、『太平記』が必ずしも天神縁起を参 照したとはいいきれないかもしれないが、巻十二との関連 日蔵上人六道めぐり譚は天神縁起諸本だけではなく、 威徳天の箇所を省略したと考えられるであろう。もっとも 『太平記』は建久本や建保本の構成に基づきながら、太政 をめぐって鉄窟地獄の醍醐天皇を見つける。ということは、 き、その美しさを紹介したのち、閻魔王宮に至り、 る。建久本や建保本では、はじめに太政威徳天の住所に行 起の安楽寺本系や神道集本では、六道のくわしい描写を行 そこで苦しむ醍醐天皇に出会う構成となっている。天神縁 は日蔵がいきなり閻魔王宮の使者とともに鉄窟地獄へ行き 譚は、大幅な簡略が施されている。たとえば『太平記』で 天神縁起諸本にくらべて『太平記』の日蔵上人六道めぐり れにちなんで日蔵の六道めぐりを載せるのである。ただ、 かに日蔵が勧請したと伝える威徳天神の社壇があった。そ 正月、高師直によって吉野山が焼き討ちされたが、そのな 二十六 「吉野炎上事」で紹介する。貞和四年 (一三四八) し『太平記』巻十二ではこれをすべて省略し、かわって巻 ったのち、地獄で醍醐天皇に会い、太政威徳天の住所に至 天神縁起では続いて日蔵上人の六道めぐりに移る。

や内容の簡略さから考えれば、あえて他書から引用する理

由が見つからないと思われる。

時平に責任を転嫁させているようにも読めるが、「万機ヲ 世ヲ治メシ」などと、 タリシ故ニ、此地獄ニ落タリ」といわせている。「民ヲ撫 誤ル事無リシニ、時平カ讒ヲ信シテ、無ー罪菅丞相ヲ流シ 書の日蔵上人六道めぐり譚にはみられない内容である。 壇にちなんでの引用であるから当然の結末といえるが、 て蔵王権現の説明へと移る。『太平記』は吉野山の天神社 う願い、化導利生を行えば自分の苦は免れると述べ、続 る。『太平記』では醍醐天皇が日蔵に道真の廟を建てるよ り除くために善根を施すよう依頼するところで終わってい える。建久本ではそのあと醍醐天皇が日蔵に自分の苦を取 かえって「万事モ誤ル事無リシ」というのがむなしく聞こ 平の讒言を見抜けなかった愚かさを露呈する結果となり、 コタラス」というように自信に満ちた言と裏腹に、 に道真左遷にのみ限定していることであろう。 いるが、それより注目されるのは、 位之間、 など五つの罪業を告白する。しかし『太平記』では 堕ちたのか尋ねると、 天神縁起・ 『太平記』巻三十五「山名作州発向事 万機ヲコタラス、民ヲ撫世ヲ治メシカハ、万事モ 建久本では日蔵が醍醐天皇になぜ鉄窟地 明らかに儒教的な解釈を盛り込んで 醍醐天皇は父・宇多法皇を困らせた 醍醐天皇の罪をひとえ ある意味で 幷北野参詣 ただ時 「我在 一獄に 他

> 補である可能性が高い。したがって、本稿での考察からは ており、 似することのみ指摘しておきたい。 蔵上人六道めぐり譚は、 除外しなければならないが、一言しておけば巻三十五の である神田本にはまったく記載がないことから、 し、これは西源院本にはみられるものの、今一つの古態本 人政道雑談事」においても、 巻二十六よりもくわしい叙述となってい 天神縁起諸本のうち神道集本に 日蔵上人六道めぐり譚を載せ のちの増 しか

(11) 結び

位を贈り、これを安楽寺で読み上げるや、 新造内裏の柱に「造ルトモ又モ焼ナム菅原ヤムネノ板マノ も天神の霊は鎮まらず、三度も大内裏が火災にあったこと、 在天神として崇めたこと(あや子への託宣は記載なし)、以後 の禰宜・良種に託宣があって北野に社壇を建て、 に述べる。 アワム限リハ」のうたが虫食いであったこと、などを簡潔 『太平記』はこのあと天慶九年(九四六)に近江国比良社 最後に一条院が天神の霊に正一 位太政大臣の官 天満大自

昨為:北闕被,悲士,、今作,西都雪,恥尸,、 生恨死歓其

今須:望足護:皇基:、

の詩が天から聞こえたことを紹介し、 ハ、大士大悲ノ観世音、 弘誓ノ海深シテ、 「偉哉、 群生済度ノ船 本地 ヲ尋ヌ

レ

彼岸ニ到スト云事ナシ、垂迹ヲ申ハ、天満大自在天神之応 ト云人ハ無ルヘシ」で結んでいる。大幅な簡潔化を図って 就ス、是以テ上一人ヨリ下万民ニ至マテ、渇仰ノ首ヲ傾ス いるため、天神縁起のいずれによっているかは判断がつか 利物日新ニシテ、一来結縁ノ人モ所願心ニ任テ成

天神縁起所引の背景

ない。

致はやはり天神縁起を参照にしたとみなさざるをえない 関係の判定は難しい側面がある。しかし、特殊な語句の一 と、天神縁起を大幅に簡潔化しながらも、醍醐天皇に対す 本に依拠するわけではなく、諸本を混合させた形であるこ 『太平記』作者の構想と偶然一致したとも考えられ、影響 る批判が強調されていることが判明した。構成上の近似は において『太平記』所引の天神縁起は、必ずしも

関係にあることは疑いない。

院の名に仮託したものであるにせよ、内容は唱導と密接な

る。『神道集』が安居院によって編集されたにせよ、安居郎のような遊行者が語り歩く一種の説教であるとの指摘もあ

現存するのに対して、旧赤木文庫本は巻一を欠く九巻本と 真福寺本は巻一・三・七のみ、天理図書館本は巻六のみが 系に大別できるが、このうち古本系は三本が伝わっている。 十巻(五十章)から成っている。現存本は古本系と流布本 『神道集』は延文三年(一三五八)ころの成立と考えられ、 その意味で、神道集本の存在は重要であろう。

臥的性格をもった唱導であるとする説もあり、巫女や行者 また唱導のテキストとして位置づけることも可能であるが(%) 公的縁起、③物語縁起に分類される。各巻は内題の下に「安 た坊で、 居院作」とみえるのが特徴である。安居院とは澄憲が開 なっており、もっとも善本といえる。 一方で『神道集』がむしろ唱導とは遠く離れた修験道の山 仏教唱導の中心である。したがって『神道集』も 内容は①神道論、

きではない。 ている。『神道集』のなかにみる説話はこの談義に近いも 臥がいかに民間に親しまれたかを示す、山臥説法が記され 導の影響のもとに編纂が進められたとしても何ら不思議で のあるところである。軍記の一つたる『太平記』もまた唱 語』などの軍記に多大な影響を与えたことは、すでに指摘 『神道集』と密接な関係をもっていたことは否定されるべ の距離の近さを考えている。いずれにしても『太平記』が のと考えられる」と述べ、『神道集』の唱導説話と『太平記』 はなかろう。永井義憲氏も「『太平記』や能狂言には、 唱導が『源平盛衰記』や『平家物語』あるいは 『曾我物

その理由はやはり安居院と慈円の関係においてとらえるべ とは確かである。なぜ天神縁起が『神道集』に入ったか、 てあてており、他の縁起とくらべれば異質の存在であるこ 編であることもあってか、巻九 われなければならない。こと天神縁起に関していえば、 編者がどのような経緯で各縁起の原資料を入手したかが なり恣意的なものがあるといえよう。当然、『神道集』の おけるすべての神を網羅的・体系的に編集したわけでは 『神道集』には多くの神々の縁起が語られるが、 たとえば賀茂社や住吉社などは所載がなく、 (四十九章) の一巻をすべ 編集にか 日本に

事は安居院から出すことになったほどである。慈円は天神 嗣・聖覚も慈円の執事をつとめており、以後、青蓮院の執 安居院を開いた澄憲が慈円と深い親交をもっていたこと すでに筑土鈴寛氏の指摘するとおりである。澄憲の継

によって提唱され、笠井昌昭氏や小仲透氏さらには村山修 摂関家の出身である慈円の手になるとの説が早く源豊宗氏 縁起成立に深く関わった人物であり、承久本の天神縁起は、 成立時期が摂関家にとって意味ある時期であることを考え 一氏などに引き継がれている。慈円が天神縁起に関与した 摂関家の周辺において天神縁起をまとめうる人物は 建久本・建保本・承久本の 通する。『太平記』もまた特に前半部分については天台宗宗の威力を強調しており、『神道集』全体の編集方針と共 安居院は法勝寺大学頭職を継承していた。神道集本を含め の影響が濃厚であり、 た安楽寺本系の天神縁起は、他の諸本と比較すると、 名である。『華頂要略』所引の「安居院相伝目録」によると 他宗を厳しく批判している。

い存在であった。法勝寺にも身を置いた天台僧・恵鎮

一方で『太平記』の編纂にあたった恵鎮は、

安居院と近

遁

ことを否定する見解もあるが、

慈円をおいて他には見当たらないのも事実であろう。 を説明できない。 のわずか二十五年間に同様の縁起が三種も製作された理由 なくば建久五年 (一一九四) から承久元年 (一二一九) まで

高いと思われる。 らされたとの指摘もある。『神道集』の成立に安居院が関 の縁起が入手され、それらをもとに一書にまとめた公算は 与していたとみなすなら、安居院の縁者によって全国各地 ら、『神道集』所載の上州関係の八章が編者の手元にもた 院と鎌倉政権ないし東国宗教界との関係が深まったことか とみても、 ば、慈円を介して天神縁起が澄憲もしくは聖覚にわたった 慈円が天神縁起に関与したことが容認しうるとするなら あながち不自然ではあるまい。聖覚以来、安居

世し、戒律遵守と社寺再建のための勧進を行ったことは有

も何ら不思議ではないであろう。

可能であろう。

具体的に述べよう。『太平記』作者は天神縁起に登場す

多く、道真の受難と報復の部分に著しい増補が認められる。窓りて、道真の受難と報復の部分に著しい増補が認められるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみであった。次にはその理由が問われなけるのは北野社のみである。『太平記』全体の構成が都に災厄をもたらすが、やがて藤原氏によって北野の神どして崇められ、社殿も整えられるとともに、藤原氏の守として崇められ、社殿も整えられるとともに、藤原氏の守として崇められ、社殿も整えられるとともに、藤原氏の守として崇められ、社殿も整えられるとともに、藤原氏の守護神となっていく過程が描かれる。とりわけ安楽寺本系の著神となっていく過程が描かれる。とりわけ安楽寺本系の本様を記しているに、本文にはその時間が記められる。名の登場が、本文の内容を著しく逸脱してまでいる。

思われる。ここに新しい「神話」が確立したとみることも系の天神縁起の系譜のなかで捉えてはじめて理解しうるとう。『太平記』における迫力ある怨霊の描写は、安楽寺本でいることからすれば、『太平記』所引の天神縁起が安楽る過程も示しているが、『太平記』が怨霊記事を多く載せこれは一方で天神縁起が「縁起」から「物語」へと成長す

が、作者もまた同じ視点に立っている。を理想として、生前からその諡号を名乗ったと伝えられるれるのである。後醍醐天皇はみずから醍醐天皇の延喜の治良親王に、藤原時平は足利尊氏に重ねて描写したと考えらあるまいか。すなわち醍醐天皇は後醍醐天皇に、道真は護る人物を、その扱う時代の人物に比定しようとしたのでは

勢が攻めてくると知るや、後醍醐天皇に笠置へ移ることを塔宮と呼ばれた護良親王は、元弘元年(一三三二)、六波羅護良親王をおいて他にはあるまい。天台座主をつとめ、大低条件である。後醍醐天皇政権下でこの条件を満たすのは、何者かによってその座を奪われること、以上三点が必要最後醍醐天皇政権を支え、政敵に対抗しうる人材であること、道真に該当するのは、文武両道にたけた人物であること、

が、それゆえ護良親王はこれより天皇に怨みを抱くことにが、それゆえ護良親王はこれより天皇に怨みを抱くことには他ならぬ後醍醐天皇の指示によって計画されたのであると、襲良親王を告禁、りていると奏聞し、怒った後醍醐天皇は護良親王が帝位を奪おうととの風聞が立ったとき、尊氏は護良親王が帝位を奪おうととの風聞が立ったとき、尊氏は護良親王が帝位を奪おうととの風聞が立ったとき、尊氏は護良親王が帝位を奪おうとしていると奏聞し、怒った後醍醐天皇は護良親王は天皇に征夷大将軍の就任を要請し、されゆえ護良親王は天皇に征夷大将軍の就任を要請しならぬ後醍醐天皇の出た。後醍醐天皇の公家が、それゆえ護良親王はこれより天皇に怨みを抱くことにが、それゆえ護良親王はこれより天皇に怨みを抱くことにが、それゆえ護良親王はこれより天皇に怨みを抱くことにが、それゆえ護良親王はこれより天皇に怨みを抱くことにが、それゆえ護良親王はこれより天皇に怨みを抱くことにが、それゆえ護良親王はこれより天皇に怨みを抱くことに

気がつく。

の生涯はまさに道真と重ね合わせて描写されていることに

望云足而已、短、只以5一令5察5万、加5詞被5恤5悲者、臣愚生前之短、只以5一令5察5万、加5詞被5恤5悲者、臣愚生前之先以5勅勘之身7欲5奏5無5罪之由1、涙落心暗、愁結言

護良親王が信頼する女房に送った手紙には

死に至らしめた献公の故事を引いて、あるいはまた『太平記』作者は、無実の罪でわが子申生をとある。護良親王はあくまで無罪を主張するのであった。

渡テ、遠流ニ処ラレム事ハ、朝庭再ヒ傾テ、武家又ハ然モナタメラルヘカリシヲ、無ニ是非・敵人ノ手ニ被トノ宮ノ武功ニ依シ事ナレハ、縦ヒ小過アリ共、誡メテ今兵革一所ニ定リテ、廃帝重祚ヲ蹈給フ御幸ハ偏ニ此

不審に思った護良親王は、

「太平記」は同時に護良親王自身が天神に厚い信仰をも
『太平記』は同時に護良親王が十津川から高野山に逃
が来のたと伝えている。護良親王が十津川から高野山に逃
のていたと伝えている。護良親王が十津川から高野山に逃

た護良親王は、まさに北野天神の御守りを肌身放さず持っと感じ入るのである。挙兵以来、幾多の戦乱を経験してき、議ナレ、佳運神慮ニ叶ヘリ、逆徒之退治何之疑カ可」有、経過身ヨリ汗アヘテ、御足ニ土之付タリケルコソ不思体遍身ヨリ汗アヘテ、御足ニ土之付タリケルコソ不思怪シク思食テ、開テ御覧セラレケレハ、北野天神ノ真怪シク思食テ、開テ御覧セラレケレハ、北野天神ノ真年来御身ヲ放タレサリケル膚之御守之口少開キタル間、

81

からに他ならない。なおかつ『太平記』作者は後醍醐天皇それは当の後醍醐天皇の政権そのものがまもなく崩壊する 作り諸国の地頭・御家人の所領に課役するなど「神慮ニモ ずの皇室が、やがて瓦解することへの伏線として重要な意 解釈している。『太平記』作者は内裏炎上の例として天神 儒教の精神に基づき、後醍醐天皇みずからの不徳のゆえと なく、 醐天皇によって新造されようとしているばかりか、 おさまらず、国弊えて民は苦しんでいるというのに、 味をもつであろう。内裏はその後、安元二年(二一七六) 詩で締めくくっている。これは天神によって守護されるは 縁起を引用したが、その最後は北野の神が皇基を護るとの の政権が護良親王の祟りによって崩壊したとは説明せず、 で造営されることがなかったと述べた上で、いまだ戦乱が に日吉山王の祟りによって一宇残らず焼失し、今に至るま に登場はするものの、かの後醍醐天皇を苦しめるわけでは しかし、その後の護良親王は怨霊になって足利氏側の前 驕誇ノ端共成ヌト、眉ヲヒソムル智臣モ多カリケリ」 ましてや足利氏の守護神となるわけでもなかった。

ぎれるこれになったりは、まこれに皮肉である。は後醍醐天皇の政権に対する痛烈な批判の手段として引用と結んでいる。結果として『太平記』において、天神縁起

天ヲ臨ント思フ、若命ヲ背キ軽ンセハ、君モ非ニ継体医場させるという、前代未聞の展開を遂げる必要を感じためである。これはまさに後醍醐天皇に道真的性格を帯びさめる。これはまさに後醍醐天皇に道真的性格を帯びさめである。これはまさに後醍醐天皇に道真的性格を帯びさめるという、前代未聞の展開を遂げる必要を感じた登場させるという、前代未聞の展開を遂げる必要を感じた後醍醐天皇から政権を奪取したのは、他ならぬ足利氏でされることになったのは、まことに皮肉である。

価値観の崩壊といえよう。と述べている。後醍醐天皇の政権の崩壊は、まさに古代的

之君」、臣モ非・忠烈之臣」、

であり、天神信仰の中世的展開がみられるのである。ここに足利政権の守護神としての後醍醐天皇が確立するのシャナ仏に比定することで国家を安泰に導かせようとした。寒歌疎石と図り天龍寺を創建した。天龍寺は後醍醐天皇の夢窓疎石と図り天龍寺を創建した。天龍寺は後醍醐天皇の南朝方、とりわけ後醍醐天皇の怨霊をおそれた足利氏は、南朝方、とりわけ後醍醐天皇の怨霊をおそれた足利氏は、

註

(1) 後藤丹治『太平記の研究』一九三八年、河出書房。

- 古屋大学国語国文学』第十五号、一九六四年十一月)。 「神道集巻第九「北野天神事」ノート(一)」 (『名
- 3 岡見正雄校注『太平記』(二)一九八二年、角川書店。
- 長谷川端校注『太平記』②一九九六年、小学館
- (5) テキストには鷲尾順敬校訂『西源院本太平記』一九三 刀江書院を用いる。
- (6) 以上の五本のテキストには真壁俊信校注『神道 神社編十一 北野』一九七八年、神道大系編纂会を用いる。
- (7) テキストには岡見正雄・高橋喜一校注『神道大系 学編一 神道集』一九八八年、神道大系編纂会を用いる。 小文
- (9) 拙稿「『太平記』における『貞観政要』の享受」(『文 (8) 松本隆信「本地物の成立と北野天神縁起」(同著『中 世における本地物の研究』所収、一九九六年、汲古書院)。
- 化史学』第五十一号、一九九五年十一月)。
- 10 九六五年十一月)。なお松本、前掲論文もこれに同意して の「文学」性―」(『名古屋大学国語国文学』第十七号、一 村上学「神道集巻第九「北野天神事」ノート(二)―そ
- (1) ただし、黒川本では本文は「春ヲ忘ルナ」とするが、 傍注に「春ナ忘レソ」とする。
- (12) 安楽寺本では「桜花」を「むめのはな」とするが、 「飛梅枯桜」の語がみえる。
- 〔1〕 竹居明男「日蔵冥界遍歴譚覚え書」(『古代文化』第二 月。のち同著『怨霊と修験の説話』所収、一九九六年、ペ の説話」(『福岡女子短大紀要』第二十三号、一九八五年六 十八巻第三号、一九七六年三月)。南里みち子「日蔵上人

- りか 高橋貞 ん社)。
- <u>15</u> 筑土鈴寛「唱導と説話文学」(同著『復古と叙事詩』

『太平記諸本の研究』一九七〇年、

思文閣出

- 所収、一九四二年、青磁社)。
- <u>17</u> <u>16</u> 永井義憲『日本仏教文学』一九六三年、塙書房。 福田晃『神道集説話の研究』一九八四年、三弥井書店。
- 18 菊地良一 関山和夫『説教の歴史的研究』一九七三年、法蔵館。 『中世の唱導文芸』一九六八年、塙書房。関
- 月)。 登蓮法師の役割―」(『駒沢国文』第十四号、一九七七年三 同書。横井孝「延慶本平家物語と天神縁起説話―付、 角川源義『語り物文芸の発生』一九七五年、東京堂
- 20 永井、前掲書
- 21 筑土、前掲論文。
- 集』第八巻「北野天神縁起」所収、一九五九年、角川書店)。 源豊宗「北野天神縁起絵巻について」(『日本絵巻物全
- 仲透「安楽寺本系北野天神縁起の性格」(『論究日本文学』 第四十九号、一九八六年五月)。村山修一『天神御霊信仰』 笠井昌昭『天神縁起の歴史』一九七三年、雄山閣。小
- (2) 村上学「神道集巻第九「北野天神事」ノート(二)―その 著『神社の歴史的研究』所収、一九六六年、塙書房)。松本 「文学」性―」 (前掲)。西田長男「北野天満宮の創建」 (同 一九九六年、塙書房。
- 岡見正雄・高橋喜一校注『神道大系 文学編一 神道

解題(前掲)。

筑土、 福田、前掲書。 前揭論文。

の「文学」性―」 (前掲)。 村上学「神道集巻第九 「北野天神事」ノート(二)―そ

同右。

『太平記』巻十二「兵部卿親王流刑事」。

31 『太平記』巻十二「驪姫事」。

宮御迎参事 幷北野天神霊験事」。 『太平記』巻五「玉木庄司宮欲奉討事 付野長瀬六郎

をもっていたとする。 平記』巻六「民部卿三位殿御夢事」)。母子ともに天神信仰 となってあらわれ、先帝還幸を予言するうたを示した(『太 来を祈念するため北野天神に参籠、夢中に天神が老翁の姿 また護良親王の母は後醍醐天皇の安全と護良親王の将

、34) もっとも『太平記』では、後醍醐天皇は討死した怨霊 に苦しめられていたと伝える。元弘三年(一三三三)八月 ある。史実を曲げてあえて公家一統の段に書き入れたのは、 く、この年「東宮」は置かれていないので、作者の虚構で 菅丞相事」)。史実では嬉子が死んだのは十月十二日が正 寺で供養している(『太平記』巻十二「公家一統政道事 園城寺の四寺に大蔵経五三○○巻を一日で書写させ、法勝 皇は怨霊の祟りを鎮めるため、東大寺・興福寺・比叡山 だのは、怨霊のしわざであると位置づけている。後醍醐天 二日、中宮の嬉子が死に、十一月三日には「東宮」が死ん

後醍醐天皇の政権が怨霊に祟られた存在であることを強調

したいからであり、作者の批判精神のあらわれであろう。 『太平記』巻二十一「先帝崩御事」。

35 拙稿 「室町初期の怨霊思想―天龍寺創建をめぐって―_

(『文化史学』第四十九号、一九九三年十一月) 。

(同志社大学嘱託講師)